

公立大学法人札幌市立大学
平成26事業年度の業務実績に関する評価結果

平成27年8月

札幌市地方独立行政法人評価委員会

1 公立大学法人札幌市立大学の年度評価の方法

- (1) 年度評価は、「項目別評価」及び「全体評価」により行う。
- (2) 項目別評価は、各事業年度における中期計画（年度計画）の次に掲げる事項（大項目）の進捗状況の確認又は評価を行う。
 - ① 大学の教育研究の質の向上
 - ② 地域貢献、国際化、大学間連携
 - ③ 業務運営の改善及び効率化
 - ④ 財務内容の改善
 - ⑤ 自己点検・評価
 - ⑥ その他業務運営
- (3) 項目別評価に当たっては、まず、公立大学法人から提出された業務実績報告書等を検証し、年度計画の記載項目ごとの事業の進捗状況について、次に掲げるⅠ～Ⅳの4段階で評価を行う。公立大学法人による評価と評価委員会の評価が異なる場合は、その理由等を示す。

Ⅳ：年度計画を上回って実施している。

Ⅲ：年度計画を十分に実施している。

Ⅱ：年度計画を十分には実施していない。

Ⅰ：年度計画を実施していない。
- (4) (3)の結果等を踏まえ、年度計画の大項目ごとに、事業の進捗状況について次に掲げるS～Dの5段階で評価を行う。

なお、評価に当たっては、事前に設定した重点的に評価する小項目の実施状況を勘案した評価を行うことができる。

S：特筆すべき進捗状況にある（評価委員会が特に認める場合）

A：計画どおり進捗している（すべてⅣ又はⅢ）

B：おおむね計画どおり進捗している（Ⅳ又はⅢの割合が9割以上）

C：やや遅れている（Ⅳ又はⅢの割合が9割未満）

D：重大な改善事項がある（評価委員会が特に認める場合）
- (5) 全体評価は、項目別評価の結果等を踏まえ、中期計画（年度計画）の進捗状況全体について、総合的に評価を行う。

2 全体評価

(1) 総評

平成18年4月に開学した公立大学法人札幌市立大学は、平成21年度に学部が完成し、平成22年4月には、デザイン研究科と看護学研究科の大学院博士前期課程、平成24年4月には大学院博士後期課程を設置し、間断なく大学を発展させている。開学時より、デザインと看護に共通する「人間重視」の考え方を常に基本として高度な教育研究を行っており、デザイン分野と看護分野における有為な人材の育成・輩出と地域に根ざした公立大学として、一層の地域貢献が期待されている。

平成26事業年度の業績評価としては、「項目別評価」の結果では、全ての項目でA評価（計画どおり進捗している）となっており、年度計画の小項目ごとの評価からも、全体としては、行うべき事業を行い、順調に業務を遂行していると評価できる。

なお、項目別評価の基礎資料となる公立大学法人札幌市立大学が策定した平成26事業年度の年度計画の記載項目（小項目）ごとの評価（小項目評価）においても、小項目数57項目のうち、5項目がIV評価（年度計画を上回って実施している）、52項目がIII評価（年度計画を十分に実施している）となっており、全ての項目が年度計画実施の水準を満たしている。

また、毎年度の詳細な年度計画の策定や自己評価の実施に加え、これに対する評価委員会の評価等を踏まえつつ、大学業務全般にわたって様々な取り組みを推進していることが、平成26事業年度に係る業務の実績に関する報告書（以下「報告書という」）からも伺える。

(2) 年度計画の大項目ごとの評価の主要なポイント

ア 大学の教育研究等の質の向上

両学部・研究科等において卒業・修了時の学生および既卒者に対するアンケート調査や授業評価アンケート、学部連携演習における「個人活動評価票」なども含めて、重層的な教育評価システムが整備されてきたことは高く評価できる。

FD研修会については、策定したFDマップ8項目に従って活発に行われており、実施内容についても、地域志向性や学部連携など、目下の大学全体の課題に即していることから、有意義なものとして高く評価できる。

デザインと看護学部の分野横断型連携の取組として、科学研究費・基盤研究（A）の地域創成デザイン研究や地域再生のためのアートマネジメント人材育成事業等のプロジェクトを推進しており、高く評価できる。特に、アートマネジメント人材育成事業は、受講者から「アートを手段に地域内外の交流を促進するつなぎ役としての自らの役割を認識し行動した」等の意見があり、意義深い取組として評価できる。

イ 地域貢献、国際化、大学間連携

公開講座の実施については、札幌市立大学公開講座やCOC公開講座をはじめとして活発に開催され、受講後のアンケート調査における満足度が5段階評価の平均で4.50との評価を得ており、高く評価できる。様々な内容、形態の公開講座の実施

は、地域とのつながりの核となるため、今後は、市民ニーズを吸い上げる方策等を多面的に検討し、高い受講満足度を維持していく企画の実現に期待する。

大学の国際化については、教員・学生の海外派遣と受入が、派遣30人、受入48人と平成25年度を大きく上回っており、着実な取組の成果として、高く評価できる。

ウ 業務運営の改善及び効率化

教職員の定員計画に基づく、計画的な採用が行われているものの、今後、多くの教授職が定年退職を迎えることから、計画的かつ確実な人材確保が図られることを期待する。

広報活動については、大学が策定した広報戦略・行動計画に基づき設置した広報室の効果的な運営がなされており、今後は、平成27年度の大学ウェブサイトの全面リニューアルに向け、行動計画の着実な推進を期待する。

エ 財務内容の改善

科学研究費補助金獲得に向け、引き続き効果的な申請支援策が採られている。今後は、不正防止のために資金獲得後の使途の適切な管理にも留意が必要である。

寄付金を活用した基金については、平成28年度の設置に向け、より具体的なロードマップを明示されることを期待する。

オ 自己点検・評価

マネジメントサイクルによる自己点検・評価活動による進捗管理は年度計画の着実な達成に重要であることから、学内での適時適切なフィードバックを期待する。

カ その他業務運営

図書整備に当たっては、教員研究室所蔵の図書も含めて、適切な蔵書点検・管理が行われることを期待する。

また、キャンパスハラスメントの防止に向けた取組については、情報漏れなどに注意しつつ、連絡先を明確にしていくことが必要である。

(3) 今後の課題

授業評価アンケートや入学者アンケート、卒業時教育評価アンケートなどの各種アンケートの実施については、調査・分析を継続的に実施するとともに、経年変化の分析などにより課題を明確化し、対応策を検討していくため、ある程度の専門性をもつ教員等を配置することや他大学の分析手法にも関心を向け、情報交換の機会をつくるなどの検討が必要である。(小項目1、2、3、5、7)

教育方針に関する6つの大項目(デザイン学部)については、学生の講義受講に際して、念頭にあるか否かで、教育効果に大きな違いが現れることから、入学時や年次ガイダンス等において周知徹底していく必要がある。(小項目13)

3 項目別評価

3-1 大学の教育研究等の質の向上に関する項目別評価

(1) 評価結果及びその判断理由

ア 評価結果

A (計画どおり進捗している)

イ 判断理由

この項目についての小項目評価の集計結果では、すべての小項目において「年度計画を上回って実施している(Ⅳ評価)」又は「年度計画を十分に実施している(Ⅲ評価)」と評価されたことから、A評価(計画どおり進捗している)とする。

(参考) 小項目評価の集計結果

小項目数	評価結果				Ⅳ又はⅢの割合
	Ⅰ 実施せず	Ⅱ 十分実施せず	Ⅲ 十分実施	Ⅳ 上回って実施	
24	0	0	21	3	100%

(2) 特筆すべき点・遅れている点

ア 特筆すべき点

年度計画を上回って実施している項目として、次のものが挙げられる。

デザイン学部の既卒者へのアンケート調査がはじまり、両学部・研究科等において卒業・修了時の学生および既卒者に対するアンケート調査や授業評価アンケート、学部連携演習における「個人活動評価票」なども含めて、重層的な教育評価システムが整備されてきたことは高く評価できる。(小項目13)

FD研修会は、策定したFDマップ8項目に従って、全学FD10回、各学部・研究科FD9回(前年度は全学FD9回、各学部・研究科FD11回)が開催され、計画の「7回以上」を大きく上回ったことに加え、参加者数も延べ710名程度(前年度は延べ800名程度)と、活発に行われており、高く評価できる。また、平成26事業年度の内容は、地域志向性や学部連携など、目下の大学全体の課題に即して有意義と思われる。(小項目14)

デザインと看護学部の分野横断型連携の取組として、科学研究費・基盤研究(A)の地域創成デザイン研究や地域再生のためのアートマネジメント人材育成事業等のプロジェクトを推進しており、高く評価できる。特に、アートマネジメント人材育成事業は、受講者から「アートを手段に地域内外の交流を促進するつなぎ役としての自らの役割を認識し行動した」等の意見があり、意義深い取組として評価できる。(小項目20)

イ 遅れている点

遅れている点は特に認められない。

(3) 評価委員会からの意見等

共通教育科目の効果検証において、両学部とも、学生の学びについて検証がされているが、どのような改善が必要であるかについての課題が明確に提示されておらず、今後は、データの経年変化に注目した分析などを通じ、見直し案にどのように繋げるのかを明確にすることが必要である。(小項目1)

平成28年度の共通教育科目の新カリキュラム導入に向け、平成27年度は実施内容を確定するとともに、新カリキュラム導入の成果の検証にも役立つ総合的な教育評価システム構築に向け、一層の工夫を期待する。(小項目4)

卒業時の学習到達度の検証について、デザイン学部53.0% (5段階スケールの4~5の回答)、看護学部70.9% (10段階スケールの6~10の回答)であることから、課題を明確化し、例えば、卒業時より前の時点で到達度の確認を行い、不十分な部分があれば、卒業までの期間に学生が自分の能力をさらに高めることができるように支援する方法等の検討が必要である。(小項目5)

平成27年度は適切な成績評価基準の作成に向け、成績評価の現状について共有が予定されているので、その実施及び課題の明確化と対応策の設定が期待される。(小項目12)

授業評価アンケートの実施等により、教育評価の仕組みが整ってきたので、今後は、調査と分析の継続的・効果的な実施のため、ある程度の専門性を持つ教職員などの配置も検討課題になると思われる。また、専門が共通する他大学における調査と分析の手法にも関心を向け、情報交換の機会を作ることが必要となる。(小項目13)

教育方針に関する6つの大項目(デザイン学部)については、学生の講義受講に際して、念頭にあるか否かで、教育効果に大きな違いが現れることから、入学時や年次ガイダンス、講義開始時等において周知徹底していく必要がある。(小項目13)

学生全体の基幹ネットワークシステムに併せて導入した情報伝達のためのポータルシステムについては、教務関連以外にも様々な運用可能性を秘めていることから、ポータルシステム導入による学生への情報伝達の効果についても確認する必要がある。(小項目17)

3-2 地域貢献、国際化、大学間連携に関する項目別評価

(1) 評価結果及びその判断理由

ア 評価結果

A (計画どおり進捗している)

イ 判断理由

この項目についての小項目評価の集計結果では、すべての小項目において「年度計画を上回って実施している (IV評価)」又は「年度計画を十分に実施している (III評価)」と評価されたことから、A評価 (計画どおり進捗している) とする。

(参考) 小項目評価の集計結果

小項目数	評価結果				IV又はIIIの割合
	I 実施せず	II 十分実施せず	III 十分実施	IV 上回って実施	
9	0	0	7	2	100%

(2) 特筆すべき点・遅れている点

ア 特筆すべき点

年度計画を上回って実施している項目として、次のものが挙げられる。

公開講座が、札幌市立大学公開講座11件やCOC公開講座11件をはじめとして活発に開催され、受講後のアンケート調査における満足度が5段階評価の平均で4.50 (昨年度4.47) との評価を得ていることは、高く評価できる。(小項目27)

教員・学生の海外派遣と受入が、平成25年度の実績：派遣12人 (教員8、学生4) から、平成26年度には派遣30人 (教員9、学生21)、受入48人 (教員12、学生36) に急増し、成果指標の「10人以上」を大きく上回ったことは、着実な取組の成果として、高く評価できる。(小項目31)

イ 遅れている点

遅れている点は特に認められない。

(3) 評価委員会からの意見等

地域貢献に係る情報の発信は、より直接的な訴求を可能とするため、ホームページの「学生・教員の活動」における紹介だけではなく、「地域連携研究センター」のページに再掲するとともに、読み手に手間がかかるPDF形式ではなく、活発な活動状況が一目で理解できるよう紹介していくことが必要である。(小項目25)

様々な内容、形態の公開講座の実施は、地域とのつながりの核になるため、今後は、公開講座のシリーズ化・体系化に加え、市民ニーズを吸い上げる方策等を多面的に検討し、高い受講者満足度を維持していく企画の実現に期待する。(小項目27)

大学の国際化に向け、学生の参加をより強力に推進していくためには、提携校との国際交流プログラム推進に加え、留学先で受講した科目の単位化が必須要件となることから、単位互換制度の早期実現に期待する。(小項目30)

海外提携校との共同研究については、提携予定にあるラップランド大学(フィンランド)との共同研究が実施されたことは評価できるが、研究内容や実施体制をはじめとして、詳細な情報を提供することが望まれる。(小項目32)

大学間ネットワークの形成に向けた取組では、文部科学省のCOC事業「ウェルネス×協奏型地域社会の担い手育成『学び舎』事業」が順調に進行しているほか、産業界ニーズGPを通じ、北海道・東北地区の大学16校とインターンシップを中心に連携を推進していることは評価できる。今後は、COCキャンパスを中心とした連携力強化と、さらなる活動の展開に期待する。(小項目33)

3-3 業務運営の改善及び効率化に関する項目別評価

(1) 評価結果及びその判断理由

ア 評価結果

A (計画どおり進捗している)

イ 判断理由

この項目についての小項目評価の集計結果では、すべての小項目において「年度計画を十分に実施している(Ⅲ評価)」と評価されたことから、A評価(計画どおり進捗している)とする。

(参考) 小項目評価の集計結果

小項目数	評価結果				Ⅳ又はⅢの割合
	Ⅰ 実施せず	Ⅱ 十分実施せず	Ⅲ 十分実施	Ⅳ 上回って実施	
8	0	0	8	0	100%

(2) 特筆すべき点・遅れている点

ア 特筆すべき点

年度計画を上回って実施している項目はない。

イ 遅れている点

遅れている点は特に認められない。

(3) 評価委員会からの意見等

経営会議、教育・研究企画会議等において、経営戦略の計画的な推進がされており、COC事業や産業界ニーズGPは、推進会議が中心となり、着実に推進されていることから、今後も策定した実行プログラムに基づき、第二期経営戦略の着実な推進を期待する。(小項目34)

教職員の定員計画に基づく、計画的な採用が行われているものの、今後、多くの教授職が定年退職を迎えるに当たり、計画的かつ確実な人材確保が図られることを期待する。(小項目36)

平成25年度に策定された広報戦略・行動計画に基づき設置された広報室では、ワーキンググループによる具体的な取組内容の検討を通じ、月1回の広報戦略カレンダーの学内配信を行うなど、効果的に運営していると見受けられる。今後は、平成27年度の大学ウェブサイトの全面リニューアルに向け、行動計画の着実な推進を期待する。(小項目41)

3-4 財務内容の改善に関する項目別評価

(1) 評価結果及びその判断理由

ア 評価結果

A (計画どおり進捗している)

イ 判断理由

この項目についての小項目評価の集計結果では、すべての小項目において、「年度計画を十分に実施している(Ⅲ評価)」と評価されたことから、A評価(計画どおり進捗している)とする。

(参考) 小項目評価の集計結果

小項目数	評価結果				Ⅳ又はⅢの割合
	Ⅰ 実施せず	Ⅱ 十分実施せず	Ⅲ 十分実施	Ⅳ 上回って実施	
4	0	0	4	0	100%

(2) 特筆すべき点・遅れている点

ア 特筆すべき点

年度計画を上回って実施している項目はない。

イ 遅れている点

遅れている点は特に認められない。

(3) 評価委員会からの意見等

科学研究費補助金獲得に向け、引き続き効果的な申請支援策が採られている。今後は、不正防止のために資金獲得後の用途の適切な管理にも留意が必要である。(小項目43)

寄付金を活用した基金については、平成28年度の設置に向け、より具体的なロードマップが明示されることを期待する。(小項目44)

3-5 自己点検・評価に関する項目別評価

(1) 評価結果及びその判断理由

ア 評価結果

A (計画どおり進捗している)

イ 判断理由

この項目についての小項目評価の集計結果では、すべての小項目において、「年度計画を十分に実施している(Ⅲ評価)」と評価されたことから、A評価(計画どおり進捗している)とする。

(参考) 小項目評価の集計結果

小項目数	評価結果				Ⅳ又はⅢの割合
	Ⅰ 実施せず	Ⅱ 十分実施せず	Ⅲ 十分実施	Ⅳ 上回って実施	
3	0	0	3	0	100%

(2) 特筆すべき点・遅れている点

ア 特筆すべき点

年度計画を上回って実施している項目はない。

イ 遅れている点

遅れている点は特に認められない。

(3) 評価委員会からの意見等

マネジメントサイクルによる自己点検・評価活動による進捗管理は年度計画の着実な達成に重要であることから、学内での適時適切なフィードバックを期待する。

(小項目46)

3-6 その他業務運営に関する項目別評価

(1) 評価結果及びその判断理由

ア 評価結果

A (計画どおり進捗している)

イ 判断理由

この項目についての小項目評価の集計結果では、すべての小項目において、「年度計画を十分に実施している(Ⅲ評価)」と評価されたことから、A評価(計画どおり進捗している)とする。

(参考) 小項目評価の集計結果

小項目数	評価結果				Ⅳ又はⅢの割合
	Ⅰ 実施せず	Ⅱ 十分実施せず	Ⅲ 十分実施	Ⅳ 上回って実施	
9	0	0	9	0	100%

(2) 特筆すべき点・遅れている点

ア 特筆すべき点

年度計画を上回って実施している項目はない。

イ 遅れている点

遅れている点は特に認められない。

(3) 評価委員会からの意見等

図書整備に当たっては、教員研究室所蔵の図書も含めて、適切な蔵書点検・管理が行われることを期待する。(小項目50)

備品整備に当たっては、毎年の実査による現物管理及び除売却処理が適切に行われることを期待する。(小項目51)

キャンパスハラスメントの防止に向けた取組については、情報漏れなどに注意しつつ、連絡先を明確にしていくことが必要である。(小項目55)